

ロビー邸 1909年 フランク・ロイド・ライト

ゾーニングと一室空間

フランク・ロイド・ライトが独立したのは19世紀末、シカゴ郊外に事務所を構え、まずは多数の住宅設計に取り組んだ。格式ばった玄関ホールを中心に矩形の箱を部屋割りする類の住宅を嫌い、開拓者魂の余韻が残る中西部の風土に相応しい住宅を模索した。居間や食堂、書斎などが暖炉を核に仕切りなして流動的に繋がる住空間を追究し、大きな開口部を設けて内外空間の相互貫入をはかり、開放性を求めた。それを中西部に広がる草原にちなみブレイリースタイルと呼んだ。その代表作がロビー邸である。ロビー氏は後に自転車製造業を始めた気骨あるエンジニアで、図を添え自らの要求をライトに明確に伝えた。

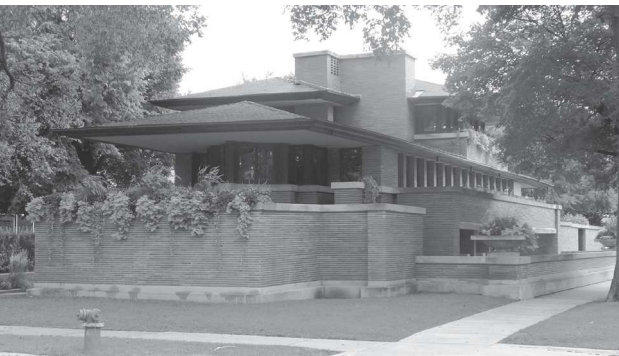
敷地は、シカゴ市内の住宅地であったが、現在は拡張したシカゴ大学構内に取り込まれ、南と西側が緑道付きの道路に面する角地で、奥行きが浅く東西に長い矩形である。

そこに、居間や食堂、遊戯室などの主空間と、玄関や厨房、使用人室、ガレージなどのサポート空間の2ゾーンに分けて2階建ての二つの棟に納め、交差点角に緑地を提供し、北と東側は境界線に寄せて雁行配置した。寝室だけを2棟の重複部分の3階に見晴らし台のように据え、玄関裏に専用階段を設けて区分している。

雁行配置の結果生まれる外部の一方は奥まった脇にある玄関へのアプローチ路とし、他方は塀で囲みサービスコートにした。さらに要求に応え南側道路側の余地を低い塀で囲み、子どもの遊び場をしつらえた。目的明確な複数の圍繞空間の設定には、現代的なコートハウスの萌芽がある。

特色は市街地住居ゆえ主空間を2階に配置したことだ。階段を上ると暖炉を核に居間と食堂にゾーン分けした長い一室空間が広がる。4方を水平に連続する窓とガラス入り框扉で囲み外にバルコニーを回した。暖炉以外に暖房器具は置かず床外周に温風吹き出しグリルを設け、どこでも出入り可能とした。天井はフラットで中央が高く周囲は一段下げて窓の上框レベルに揃え、それが同面で外へ延びて庇の揚裏になり内外空間の相互貫入を誘引し、かつ庇下バルコニーは都市との緩衝空間になる。また、深い庇は日射調整を果たして影を落とし内部から街路を見下ろせるが外から内部は見えにくくする。軒線と奥まった横連続の開口部、柱列、手摺り壁、低い塀と水平要素を重畳させ、プライバシーを守りながら街路とほどよい関係を生んでいる。

コアのある一室空間を含むこの住宅が、欧州の建築家に与えた影響は大きい。最も深く空間展開の可能性を洞察したのはミースと思われる。住宅に限らずコアプランの素はここにある。機能をゾーニングによって空間化する方法も、やがて住宅を超えて普及していく。



南西側からの外観(写真はすべて2015年9月10日撮影)



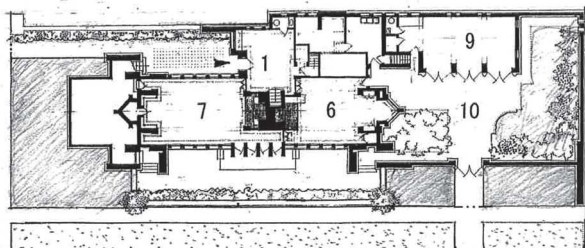
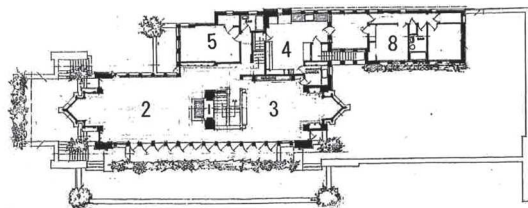
玄関へのアプローチ



2階への階段



居間から食堂方向を見る。暖炉の上は2分し、天井を連続させている



(上)2階平面図 (下)1階平面図 1玄関 2居間 3食堂 4厨房
5客室 6子供遊戯室 7ピリヤード 8使用人室 9ガレージ 10サービスコート